

令和 4年度 園評価書

園番号 22 園名 登呂こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくてきている B : 概ねできている, C : あまりできていない, D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かでたくましい子	ひらめきがつながる	「おもしろい」「もっとやってみよう」と試行錯誤を繰り返し、遊びを展開している	・「もっとこうしてみたい」と試行錯誤の中から、遊びの面白さや自分なりに考える楽しさに気づき、遊びの続きを楽しむ姿が増えた。また困難なことがあっても「いいこと考えた」と様々な方法を自分や友達と考えたりして達成感を感じている姿が増えている	A	A	・全体的に見て、よく整理され、課題が出ている項目については細かいところまで分析されている	・環境構成を行うことや、一人一人の子どもも理解を深めることの大切さを常に意識できるような研修の方法を検討する。職員が自分事として保育に携わり、子どもの変化や保育の面白さを気軽に話し合える場を作っていく
		自分の思いを表現したり、相手の思いを聞いたり共感したりしながら、身近な人とのかわりを楽しんでいる	・考えたり、試したりしながら遊びを楽しむようになり、同じ目的に向かって遊ぶ姿が増えた。また、友達と思いや考えが重なり、うまくいかなかったり、失敗したりした時でも話し合いながら遊びを進めていこうとする姿が見られるようになった	A	A	・小中高と様々な学校を見ているが、こども園が一番大変だと思う。ここまで、園評価をまとめているのだから、提出先には、しっかりと評価をしてもらってもいいのではないかと考える	・保育者の援助のタイミングについて職員同士が具体的な話し合いを行い、声掛け、関わり、遊び出し、展開など先取りすることなく、子どもの主体性を支え、今後も子どもの姿を肯定的に捉えていく
		体を思いっきり動かすことを喜び、次への意欲が育っている	・園庭だけでなく、地域の自然や公園などを活用し、四季を通して五感に触れる経験を積み重ねることができた。また、異年齢や友達との関わりの中で、子ども自身が「もっとやってみよう」と遊びを工夫し、体を動かして遊ぶことの楽しさを味わうようになった	A	A		・今後も感染状況を踏まえながら、異年齢の関わりを大切にしていきたい

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)	
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達や経験などを十分に把握し、育ちのつながりを意識しながら、一人一人に合わせた適切な援助を行っている	・一人一人の発達の姿を肯定的に受け止め、個の良さや得意なこと、その子らしく育っていく姿を支えている。また、日誌を読み合い、他クラスの遊びや子どもの姿を理解することで、育ちのつながりを意識することができた。個々の姿や家庭事情に配慮し、経験してほしいこと、伸ばしたい方に合わせた援助を工夫し次年度につなげた	A	A	・B評価をつけている項目については、なぜそれが十分でない内容なのか精査されているのよい。また、改善策とつながっているのもよい	・教育課程を活用し、学年ごとの育ちをおさえ、一年を通して育ってほしい姿を職員間で共有し、一人一人の成長に合わせた関わりを意識できるように話し合いをしていく	
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	在園時間や個々の生活リズムの違いを踏まえ、子どもが主体的に園生活を送れるようにしている	・早番、遅番も変わりなく過ごせるようクラス担任を中心に連携を図り、報告、伝達に努め、一人一人の子どもが安心して過ごせるようにした。また、生活の見通しが持てるような声掛けや、予定表などボードを掲示して子ども達が主体的に活動に取り組めるようにした。	A	A	・実体験を大切にしているところが良い。昔は、外遊びが主だった。その中で様々なことを覚えた。実体験の中で学びを今後も活かしてほしい	・異なる登園時間、保育時間を考慮し、遊びや活動に満足できるように今後も職員間で連携していく
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの「ひらめき」が実現でき、試行錯誤が繰り返せるような環境が構成されている	・見通しをもった保育の中で、子ども達のひらめきがつながるような可動遊具、素材の準備、タイミングなどを見極めて関わり、遊びの展開を予測し試行錯誤できるような環境を整えた。また、室内、園庭共に遊びが選べたり楽しいが続くような遊び出しの工夫や再構成に努めた	A	A	・安全は何より第一である。子どもにははたわらずに大事なことなので、継続してほしい	・繰り返せる環境やじっくり遊びの時間と場の保障を今後も継続していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	避難訓練や不審者訓練、交通安全指導を計画的に実施し、訓練の反省やヒヤリハットの分析を通して、事故予防や安全確保に努めている	・職員と園児が速やかで安全に避難できるように話し合い、毎月非常時を想定した訓練を計画、実施した。早番、遅番、土曜保育時や予告なしでの訓練を行うことで通常とは違う状況での連携を確認した。ヒヤリハット、反省、課題を伝え合いながら、安全確保に努めている	B	B	・避難訓練では、本日の災害の怖さを子どもにも伝えた方がよい。毎月繰り返してやっていることの大切さを子どもにも伝えていくことで、自分の身を守る方法を考えるようになる	・今後もヒヤリハットの報告が周知だけで終わらないように、改善策等を職員間で話し合うように努めていく	
		(1)健康教育の充実	食育活動や栽培、手洗いなどの感染症予防を通して、健康的な過ごし方や自分の体に興味を持てるような環境を作っている	・手洗いは視覚教材を活用したり、実際に手本を見せたりして丁寧に伝えている。感染症対策として手洗い習慣、消毒、換気等に努めた。年間の食育計画に基づき、毎月の食育活動を通して、食材に興味関心を深めた	A	A	・安全の基本「5S活動」を取り組んでほしい	・安全の基本「5S活動」に力を入れていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	個別の支援計画を作成し、子どもの育ちや支援方法を園全体で共有し、支援している	・保護者面談を通して、個々の発達に合わせたサポートプランが作成され、個の育ち、変化、家庭環境を十分に考慮し、支援が行われている。緊急の伝達事項は全職員が把握できる体制にはなっている	B	B	・安全の基本「5S活動」を取り組んでほしい	・担当者の不安等を解消するために、個々のあられや支援方法を検討するケース会議を計画的に行い、実践につなげる	
		(1)組織体制の充実	責任をもって分掌に取り組みと同時に、連携を取りながら全員で進めているという意識を持っている	・分掌リーダーを軸に、一人一人の職員が協力し、計画的に実践されている。また、自分の役割だけでなく、他の職員の役割も把握したり、手が空いた時には協力したりして、連携を深めることができた	A	A	・手洗いをやっていない子に対してどのような指導をしていくのか?何となく「やりました」で終了していませんか?もう一度職員全員に投げかけてほしい。一人一人を確認することは、置き去り事件等にもつながると思う。声掛けや確認、見届けを徹底してほしい。また、ある程度保護者にも協力してもらった方がよいのではないかと	・職員一人一人が自身の得意分野を活かせるような分掌体制をとり、分掌での役割分担を年度のはじめに確認し運営していく
6 研修	(1)研修体制の充実	園内研修を通して、日々の実践や公開保育の振り返りを行い、重点目標や研修テーマの実現につなげている	・職員一人一人が、園全体で研修を進めていくという意識をもったことで、話し合いから多様な視点の学びを共有できた。また、研修で出たキーワードや自身の学びが明日への保育の手立てとなり、援助の方法や環境の再構成などに活かされ、子どもの育ちにつながった	A	A		・現状維持にとどまらず、常に成長意識をもち、職員一人一人が参加意識をもつよう工夫していく。また、その都度PDCAサイクルを用い、なぜ改善が必要なのか、園全体で検討できる体制を作っていく	
		(1)教育・保育環境の充実	「どうしてかな」「もっとやってみよう」と思えるような地域を活かした体験、人、物との出会いの機会を作っている	・登呂博物館や国際交流、環境学習の職員など、様々な人との関わりの中で地域の資源に対して興味関心を深めることができた。また、登呂遺跡を活用し、稲作体験、水田を使った泥んこ遊び等この地域ならではの活動を体験できた。特に年長組は登呂遺跡が自分達の家作りに反映され、遊びへとつながった	A	A	・少人数の意見に振り回されるのではなく、今後も今やっている教育・保育を丁寧に行っていくほしい	・今年度経験したことが次につながるように、伝達していくだけでなく、記録の方法にも工夫していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	登降園時に様子を伝えたり、園での姿を連絡帳やボード・お便り(写真の活用)で伝え、子どもの育ちを共有している	・遊びや生活の様子を視覚化し、子どもの育ちを保護者に発信した。登降園時に保護者とのコミュニケーションを図り、成長を共有した。また、コロナ禍ではあるが、戸外での参加会を実施し、保護者に子どもの様子を見てもらう機会を設けたことで、園の様子が分かり、教育・保育についての理解を深めてもらうことができた	A	A	・重点項目をもっと絞った方がよい。保護者にも呼びかけ、協力を仰ぐことも必要である。	・保護者から園での様子をもっと詳しく知りたいとの意見もあったので、来年度の保護者参加の行事の時期、方法を早急に話し合っていく	
		(1)近隣の園との連携	近隣の小学校や園との交流を図り、情報交換や研修を進めている	・近隣小学校の公開授業には、年長担任が参加し、職員同士の交流を図り、情報交換をした。また、自身の保育に活かすため、近隣の公立こども園の公開保育に参加し、環境構成や援助の方法を学んだ。支援児が通う施設との交流も増え、見学してもらうことで、日々の支援方法を具体的に学ぶ機会にもつながった	B	B	・地域の支えがないと何事も前には進んでいかない。支えがあることで園の子ども体験が豊かになるので、できることがあったら協力させてもらいたい	・防災の観点からも南部小、富士見小へのアプローチを続け情報交換を図っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域に親しみを感じ、豊かな生活体験が得られるよう地域との交流を行っている	・コロナ禍ではあるが、感染対策をしながら、登呂遺跡や登呂博物館、近隣の公園、消防署などに目的をもって出かける機会を作った。地域の自然と触れ合うことで様々な発見をし、園での遊びに取り入れた。また、登呂の家の方や駿河総合高校、大里中学の学生らとの交流を図り、地域の「体験、人、もの」との交流が深まった	A	A		・今後も地域の強みを活かし、様々な交流機会を設けていく。そのために、職員自身がより地域の素晴らしさを知ることが心がけていく	